２０２２年度　自己評価書
１　学校園経営計画
　別紙のとおり

２　自己評価

領域	重点目標・具体的な取り組み	達成状況・成果と課題	評価	今後の改善方策	学校関係者評価を踏まえた今後の改善方策
学校運営	○重点目標「何よりも安全を最優先に」を基本姿勢に、各種避難訓練の見直しを行う安全管理の徹底をはかった。 ○大学と一体となって、責任を持って附属学校の使命である研究・実習を果たすように努力する特に、幼小中連携研究，自己実現活動を中心とした幼小校内研究を充実させる。 ○保護者や地域住民の方々からの声を学校運営に生かす。 ○子ども家庭支援センターや児童相談所などの外部機関と連携し児童・保護者対応を迅速に行う ○子育てトークと個別相談を計画的に実施する。スクールカウンセラーや教育支援員と連携した支援体制を確立する。（幼）	○幼児児童の「心の安全」対策の徹底を図り、カウンセラー、心理実践実習生も含め、担任以外の大人と幼児児童の状況を共有し、個別指導に生かすことができた。 ○未来の学校プロジェクトにおいて、大学・企業・行政と協力しながら研究を進めることができた。 ○コロナ禍により、近隣町会長連絡協議会を開催することができなかったが、近隣町会長の一人である学校評議員からの意見をもとに、学校運営できた。	B	○児童及び保護者からのアンケート調査の両面から、課題を絞って取り組んでいく必要がある。 ○保護者のアンケート結果を学校運営に反映させる方策を考えていく。	○幼児児童の実態把握のためにも、SC,SSWとの連携を計画的に行っていく。 ○地域連携の一環として文京区の公立学校の発展に貢献できるよう、本地区の公開研に文京区の教員が参加しやすい体制を検討していく。 ○近隣町会長連絡協議会の在り方について検討していく。 ○各地区の子家センと確実に連携がとれるような体制を整えていく ○SC・SSWと十分なコミュニケーションをとり、　問題点の共通認識を持つように努める。
教育活動	◎子ども自身の願いや思いを大切にした活動を創造・工夫する。（重点目標） ○幼小中連携の教育を大事にする ○竹早の「スタンダート」を大切にしていく。 ○教育課程特例校として、独自の教育課程の開発に取り組む。	○コロナ禍においても一人ひとりの思いや願いを尊重する指導を継続し、アンケート結果からも子どもたちの主体性が育ってきていると評価できる。 ○１～３年、４～６年に分けた竹の子祭の２日間実施及び対面形式の竹早祭に加え、清掃をはじめとする縦割り活動を感染対策に留意しながら実施することができた。日光林間学校もすべて実施することができ、上学年は下学年にいたわりの気持ちをもち、下学年は上学年に憧れをもつ縦割り活動の価値を再確認することができた。 ○クラスで課題を追究するするようなプロジェクト的な活動や個の興味関心を探求する活動である「自己実現活動」を通して，子どもたちの願いの	A	○教師が子ども一人一人の思いに寄り添いながらも、子ども自身が仲間の気持ちを思いやれるような機会をとらえ、支援・指導していく方策を研究していく。	○行事の在り方について、コロナ禍前後の実態を比較しながらより実態に合った計画を検討していきたい。

	○異年齢集団による自治的な活動を大事にする。 ○コーディネーター，校内委員会を中心に特別支援の教育環境を整備する。 ○小学校教育への連続性を踏まえた教育実践を行う（幼）	実現を尊重しながら協働的な取り組みを行うことができた。 ○支援を要する児童の保護者とSCが相談できる環境ができている。SCと担任が保護者や児童のことを共有できている。 ○「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」について具体的な幼児の姿から捉えていき理解を深める。（幼）		○特別支援教育については、今後はさらに個々のケースに応じて保護者、児童に寄り添い進めていきたい。	○自己実現活動の可能性を広げていくための方策を模索していきたい。
研究活動	◎幼小一貫，幼小中連携の教育を大切にする（重点目標） ○教育課程特例校である「自己実現活動」の校内研を通し，授業を見取る観点を明確にし，分析し，授業改善を図る。 ○小金井園舎と情報を交換し、今日的な課題や昨年度の反省を生かした教育実習プログラムを立案し、実践を行う。（幼）	○公開研究会は参加者を上限３００名に限定した対面開催を実施し、参観者・教職員双方から好評を得ることができた。 ○「自己実現活動」の研究を進め，実践事例の分析と理論の構築を図った。 ○「自己実現活動」では、根本の活動のつくり方について、各学年部ごとに提案、検討を行うことができた。	A	○授業実践を通して「自己実現活動」の子どもたちの問題解決に対する切実感を大切にするために、子どもたちの考えた方策をできるだけ生かす必要がある。活動での失敗や試行錯誤も学びに変えられるような教材研究を深めていく。	○大学・企業・行政との連携を継続しながら、新たな研究体制を検討していきたい。
学生の教育･支援活動	◎学生に教育実習の場を提供し，教員として優れた資質をもった人材を育成する。 ○子ども一人一人が課題を自分のものにする過程を大切にし、急かせることなく、丁寧に子どもに寄り添う事の大切さを指導する。	○オープンスペースやランチルームを活用して、平常時に近い形の教育実習を実施できた。 ○学級運営や教科指導の基本理念と実践的な方法を丁寧に指導し、子どもたちを指導する教師の仕事の楽しさとやりがいを実習生が感じることができるような関わりをもつことができた。 ○学生が日常的に関わることができる教育現場としての役割を果たすことができるよう、卒論･修論の協力、ボランティア等、可能な範囲で応じることができた。	A	○今後も学生が日常的に関わることができる教育現場であるよう、調査や卒論・修論等、学生の受け入れ体制を整備する。	○学生の支援体制を今後も継続していく。
社会貢献活動	◎附属学校の使命である地域の拠点校として特に，文京区教育委員会との連携を密にしていく。（重点目標） ○国内外の視察・参観者の受け入れを積極的に行う。	○本年度も文京区教育委員会と連携し文京区公立校３年次教員研修の講師として本校教員派遣した。 ○昨年度に比べ視察・参観者の受け入れを少しずつ広げることができた。 ○学大卒論・修論協力 臨床心理実習生、聖路加国際大学より養護実習生を受け入れた。	A	○今後も、地域のモデル校としての役割を果たし、地域教育の発展に貢献していく。	○今後も積極的に外部へ活動を公開することによって、更に社会貢献活動を行う。

3　その他の特記事項
特になし